追悼の意

沖縄県立首里高等学校三年　平良　優名

一九四四年八月二十二日二十二時十二分、米潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃により、対馬丸号沈没。一四〇〇人以上の命が犠牲となった。それから八〇年を迎えた今。私は平和について考える。平和とはなんなのかと。

私の親戚に平良啓子さんという方がいる。啓子さんは国民学校四年生の頃、国から疎開の命令を受け、兄姉、従兄弟、祖母、兄の婚約者と共に対馬丸に乗る事が決まった。仲の良かった従兄弟の時子さんは最初、家族から疎開する事を反対されていたが、何とかそれを押し切り、一緒に疎開する事になった。対馬丸に乗った翌日の夜、闇に包まれた静寂な海に地響きのような物凄い大きな音が響き渡った。驚き、目を覚ました啓子さんは、沈没していく船を見て、急いで海に飛び込んだ。燃え上がる対馬丸。荒れ狂った海。泣き叫ぶ子供達の悲痛な声。どんなに怖かっただろうか。何度も波に飲まれそうになりながらも「生きたい」その一心で死体を掻き分け、必死に筏にしがみついた。約6日間、沖縄の強いカンカンデリな太陽に照らされ、潮風にあたり、肌は爛れ、夜は暗く、冷たい海のせいで、髪は塩で固まり、乱れていた。その見た目は酷いものだったという。6日間も海で漂流している事など今じゃ想像もつかない。まるで、映画の世界のようだ。眠気に誘われながらも、海に落ちるとそのまま死んでしまうと思いで、自分を必死に叩き起こした。サメが漂流民を襲う姿を見て、近くにサメが来た時は自分もあんな風にやられるんじゃないかと恐怖に怯えた。日が経つにつれ、一緒に筏に乗っていたはずの人はいつのまにか半数以下に減っていた。そして、六日目を過ぎた頃、無人島に着いた。喉が乾いていたので、地面を深く掘り水を飲んだ。その時運良く船を見つけ、助けられた。

遭難から約半年経った翌年の2月、ようやく沖縄に戻り、母親と再会した。嬉しかった反面、時子のお母さんに、

「生きて帰ったのね、うちの時子は太平洋に置いてきたの？」

と言われ、何も返す言葉がなかったという。当時まだ小学生だった啓子さんにとって、その言葉は相当きついものだったと思う。もし自分が啓子さんと同じ立場だったらと考えたが、高校生の私でも返す言葉は思いつかなかった。時子を疎開させ、命を奪い殺したのは私なのだとずっと自責した。

対馬丸号沈没により、命を落とした人は数えきれないほどいる。しかし、確かなものではない。それは、箝口令が大いに関係していると思う。箝口令とは、他人に話す事を禁ずる命令の事である。対馬丸が沈没した事が広まってしまうと、疎開に行く人が減り、食料不足に陥ってしまう、そういうリスクがあったのかも知れない。しかし、啓子さんを含んだ対馬丸事件の生存者の方々は、箝口令を敷かれた事により、戦後もずっと辛く苦しい記憶を誰にも話せないまま、心の中の重荷として残っていたのであった。対馬丸事件以外にも沖縄県営鉄道輸送爆弾爆発事故など箝口令によって多くの人が苦しんだ。戦争に勝つ為、全ては御国の為、天皇の為と翻弄され、逆らうと非国民と言われ、酷い扱いを受ける。誰が悪いとかそんな事言うとキリがない。戦争は人間そのものを変えてしまうのだ。米兵も日本兵も自分の国を守る為に命を懸けて戦う。そして、沢山の敵兵を殺せば殺すほど輝き、英雄として歴史に名を刻む。そんな時代だ。

今現在、沖縄では語り手が不足している事が問題視されている。だが、そんな理由で戦争が風化されてしまうというのは言い訳に過ぎないと私は思う。戦争の話を聞くと、あまりにも残酷なものばかりで耳を塞ぎたくなるような人もいるかもしれない。だからこそ、耳を傾け深く知るべきなのだ。そうする事でこんな悲惨な出来事は二度と繰り返してはいけないという認識が更に強まり、多くに人が平和について考えるきっかけが生まれる。そして沖縄から日本へ、日本から世界へと平和が繋がっていくと思う。

私は将来、学芸員になりたい。今の自分は、沖縄戦について日本国民であり、沖縄で生まれ育ったという理由から日本だけが一方的に被害を受けてしまったという考えが無意識に正直あると思う。しかし、その固定された概念や視点から一度離れて、敵国であったアメリカや日本軍として強制的に駆り出された韓国の方々はどのような過去や思いを秘めているのかを知りたい。「世界平和」それが実現するのはまだまだ遠い未来だと思う。だからこそ、沖縄戦という悲惨な過去を偽りなく、ありのまま伝えたい。今日も世界の平和を願って。